

「社会を明るくする運動」
埼玉県推進委員会委員長賞

ほんの少しの優しさで

吉川市立吉川小学校

5年 小野寺 虎之介

ぼくは平和主義だ。相手に悪口を言ったり、相手のことを傷つけたりすることなんて、絶対にしたくないし、されたくもない。平和が一番いいに決まっている。だって、平和なら誰もが楽しく人生を送れるのだから。

なぜ、非行や犯罪が無くならないのだろう。

その日ぼくは、同級生と下校していた。話をしているうちに、さ細なことから口論になってしまった。普段ならすぐに仲直りができたのに、その日は違った。ぼくもゆずれないところがあって、暴言を吐いてしまったのだ。その言葉が友達の心を傷つけてしまったらしい。ぼくは友達から暴力を振るわれた。痛い、辛い、悲しい等、様々な気持ちが頭の中を巡ったが一番大きく湧いた気持ちには、この上ない怒りの感情だった。

「今すぐにでも、やりかえしたい。」

そんな気持ちが沸々と湧いてくるのが分かった。それまで我慢していたけど、もう我慢の限界！反撃してやる！と思って手を上げた瞬間、後ろからある女の子が、

「やめなよー」

と声をかけてくれた。その言葉のおかげで、ぼくは友達に手を出さずに済んだ。そして、その言葉

がきっかけで友達もぼくに謝ってくれ、仲直りすることができた。

もしあの時声をかけてもらえなかったら、ぼくはきつと、怒りに任せて友達のことを傷つけてしまっただろう。考えただけでもゾツとした。加害者になるところだった。

ぼくは、あの言葉に救われたのだ。女の子の勇氣と優しさに心を打たれた。

数日後、同じクラスの友達でみんなより少しだけ背の高い男の子が、ぼくに相談してきた。習い事で、整列をするときに悪口を言われたらしい。ぼくは迷わず、

「ぼくがついているから大丈夫だよ。」
と言ってあげた。

あの時の男の子の安心した顔は今でも忘れられない。人の役に立てたことが何より嬉しいと思えた。

家に帰って母にそのことを話した。母には、
「えらかったね。」

と褒められ、ものすごく嬉しかったのだが、ふと、友達と喧嘩した時のことが頭をよぎった。もし、あの時ぼくが暴力を振るってしまっていたら、母に褒められることも無かったかもしれないと思った。

その日の夜、布団の中でぼくはなぜ暴力を振るおうとしてしまったかをもう一度考えた。

そういえば、友達に暴力を振るわれた時、ぼくの心は傷つき、心が冷たくなっていくのを感じた。それは、だれかに優しくしてあげたいという気持ち

ちが消え、怒りという名の危険且つ不安定な気持ちになっていくことの証だった。

その結果が友達に手を上げたことにつながってしまったのだと分かった。

逆に、女の子に助けてもらった後のぼくの心は、まるで温かい布団に包まれているかのようにポカポカした。誰に対しても優しくできるような気さえした。世界中の人が、この時のぼくの気持ちになつたら、絶対に非行や犯罪は起きないだろうなとも思った。

今、テレビをつけると、毎日のように、非行や犯罪のニュースが流れている。非行や犯罪が起ると、被害者はもちろん、加害者側の人生も大きく変わってしまう。

ではなぜ、だれも得をしない非行や犯罪が起こるのか。起こしてしまうのか。

ぼくは加害者側の人が、誰かに優しくしてもらえなかったことが原因だと思う。人は、誰かに優しくしてもらえると、自然と優しくなれる。ほんの少しの優しさで、相手の心を温めることができる。ぼくがそうであったように。

だからぼくは、これから、少しでも勇気を出して、ぼくが持っている優しさをたくさんの人にプレゼントしてあげたい。そして、一人でも多くの人の心を温めてあげたい。

この世が優しさでいっぱいになれば、きつと、今よりももっと明るい社会が作られると思う。ぼくはそんな優しさであふれた明るい社会を生きしていきたい。